

変化の時代に足を引っ張るのは… 実は「自分」

—アフターコロナをイメージした真なる創業の記録と私の流儀—



株式会社ドリームチーム・ディレクター 代表取締役社長
中島 克也 (なかじま かつや)

早稲田大学大学院理工学研究科修士課程修了。株式会社野村総合研究所にて経営コンサルタントとして勤務し、企業風土の改革、組織・人材の活性化、行動変革などのチェンジマネジメント分野を得意とする。2001年4月、株式会社コーチ・トゥエンティワンに入社。2001年10月コーチ・エィの設立に参画。常務取締役就任。企業のダイナミズムをドライブさせるための大規模プロジェクトを企画・運営する。経営者やリーダーをコーチするとともに、組織をまるごとコーチすることにより、確かなる企業風土改革、業績向上を多くの企業にて実現。行動変革を促進、定着させるツール開発や、企業変革活動につきものの停滞、頓挫を乗り越えるための技術開発を統括。2011年4月より2012年9月まで中央大学大学院戦略経営研究科客員教授に就任。2012年9月末にコーチ・エィを退職。2012年10月より株式会社ドリームチーム・ディレクターを起業。経営者やリーダーへの個別コンサルティングを通じて、「ドリームチーム・ディレクター（夢のようなチームを創る演出家）」の育成をミッションとする。

今年の2月21日、私はあることを覚悟に決めていた。

「今回のコロナは、かなり長期戦になる」

世間では今思えば超楽観論が多かった中で私は「年内は集合研修はできないという、最悪のシナリオでいく。なので、全てのサービスをオンラインに置き換えよう」と決めたのだ。世間では「どうやらコロナは暑さに弱いらしいから、夏頃にはきっと収まるよね…」というような超楽観論が多かったときであり、私の先見の明と自慢したいところだが、単なる心配性だったかもしれない。

とにかく2月の中旬にはお客さまにも提案を行い、自分でもオンラインを使いこなすために外部オンライン研修に申し込み、2月23日には最初の講座を受講し、25日には個別コンサルをオンラインで受講した。そして、2月28日には完全に全業務をオンラインに置き換えることができ、ほぼ完

全テレワーク（95%在宅）に突入した。

さらに3月の頭には次なる覚悟を決めた。

「もはやコロナが終息するのは1年半、2年後くらい。それどころか終息するということもなく、ずっとウィズコロナが続く可能性もある。もう有事に対する対処ではだめだ。集合研修ができないからオンラインに乗り換えたのは良いが、きっとこの有事が収まったアフターコロナには、まったく新しい時代が来て、もはや今の状態に戻ることは決してないだろう」と、さまざまな方と語る中でこんなことを確信するに至ったのだ。

そんな思考にシフトしたときに、「アフターコロナをイメージしながら自分の作品（自分を動かすOS、行動、サービス、ビジョン等）を抜本的に作り直す。いったん廃業し、新創業させるくらいの勢いで！」という思いが湧き上がった。その後の1週間は、



が低下したり、スピードが遅くなったりという弊害が生じてくる。平時であっても、例えば私の「最高のものを創りたい」という美学は、ともすれば「完璧主義」につながる。それを自分の中で処理する分にはどうということもないが、部下や他者に押し付けると相手をつぶしてしまうこともある。変化の時代にあっては、その変化を積極的に取り込もうとする力をそぐことにもなる。変化の中でも変えてはいけないことも多々あるのはもちろんだが、今までの価値観とそれに基づくOSをうまくコントロールしないと、変化へと向かう足を引っ張るのは結局自分ということになってしまう。

そういう自分を戒める言葉を、私は執務スペースのあちこちに山ほど貼り出している。

例えば

「スピード、スピード、スピード」

「2割の出来で、その日のうちに」

「混迷の時代、正解はない。あるのは暫定解のみ」

「爆速PDCAをぐるぐる回せ」

などが一例だ。日々これらの戒めを唱えながら自らのOSを上書きして船出にこぎつけた「新創業」の今後の展開を、今は私自身楽しみにしている。同じようにアフターコロナを模索するリーダーの皆さんに、本稿がヒントになれば幸いである。